

流浪の民

流浪の民（るろうのたみ、ドイツ語:Zigeunerleben）は、ドイツ・ロマン派の作曲家ロベルト・シューマンによって作曲された1840年の歌曲。『3つの詩』作品29の第3曲。本来はピアノ伴奏（トリアングルとタンブリンをアドリブで加える）の四重唱曲だが、合唱曲として演奏されることも多い。原題は「ロマの生活」もしくは「ロマの人生」の意味。

詩はエマヌエル・ガイベル（ドイツ語版、英語版）によって書かれたもので、ナイル川のほとりから、スペインを経て、ヨーロッパの町々をさすらうロマ（かつてはジプシーと呼ばれることが多かった。ドイツ語ではツィゴイナーとも）の生活の物悲しさを歌ったものである。「ジプシーがもともとエジプト民族である」という俗説がわからないと、歌詞の内容は理解が難しい。

日本語の訳詞は石倉小三郎による。名訳として有名で、原詩を超えるとも評されるが、原詩との乖離が大きいとの批判もある。
(Wikipedia)

ジプシー

元インドに住んでいた人々が10世紀あたりに故国を出、ヨーロッパ等の地域に広く移住したのが始まりとされている。「ジプシー」の呼称は、浅黒い肌のためにエジプトから来た人(Egyptian)と誤解されたためである。余所者であるため、特に外観的特徴の大きく違うヨーロッパでは移住当時から現在に至るまで迫害が続いている。なお、「ジプシー」の呼称は差別的な意味合いが含まれるらしく、「ロマ」、「シンティ・ロマ」などの呼称が推奨されている。（他項で「非定住型」と述べたが、）もちろん定住型の生活を送るロマも相当数いる。

倨居(うつい)する

膝を立てて地面に座る座り方を言います。胡坐(あぐら)では不遜、倨居なら控えて座るという感じでしょうか。



彼らの音楽性は世界各地に大きな影響を与えた。クラシックではリストの『ハンガリー狂詩曲』やサラサーテの『ツィゴイネルワイゼン』などに彼らの影響が見られる。また、フラメンコはスペインのアンダルシア地方土着の音楽とロマ音楽が融合したものとされている。

(ニコニコ大百科)

非インド起源といわれる民族もあり、特にエジプシャンはアレクサンダー大王に従って移民したエジプト系の末裔を自称しており、それぞれがロマとは別のグループであることを主張する。
(Yahoo! 知恵袋)



歌詞

ぶなの森の葉隠れに宴寿ひ賑はしや
松明明く照らしつつ木の葉敷きてうついする

これぞ流浪の人の群れ 眼光り髪清ら
ニイルの水に浸されて きららきらら輝けり

燃ゆる火を囲みつつ強く猛き男やすらふ
女立ちて忙しく酒を酌みて差しめぐる

歌い騒ぐその中に南の国恋ふるあり
悩み払う祈言を語り告ぐる嬸あり

愛し乙女舞ひ出でつ
松明赤く照り渡る
管弦の響き賑はしく 連れ立ちて舞ひ遊ぶ

既に歌ひ疲れてや 眼りを誘ふ夜の風

慣れし故郷を放たれて 夢に楽土求めたり

東空の白みては夜の姿かき失せぬ
ねぐら離れ鳥鳴けばいづこ行くか流浪の民

原詩

Zigeunerleben

Text von Emanuel von Geibel (1815-1884)

Im Schatten des Waldes, im Buchengezweig,
da regt's sich und raschelt und flüstert zugleich.
Es flackern die Flammen, es gaukelt der Schein
um bunte Gestalten, um Laub und Gestein.

Da ist der Zigeuner bewegliche Schar,
mit blitzendem Aug' und mit wallendem Haar,
gesäugt an des Niles geheiligter Flut,
gebräunt von Hispaniens südlicher Glut.

Ums lodernde Feuer in schwellendem Grün,
da lagern die Männer verwildert und kühn,
da kauern die Weiber und rüsten das Mahl,
und füllen geschäftig den alten Pokal.

Und Sagen und Lieder ertönen im Rund,
wie Spaniens Gärten so blühend und bunt,
und magische Sprüche für Not und Gefahr
verkündet die Alte der horchenden Schar.

Schwarzäugige Mädchen beginnen den Tanz.
Da sprühen die Fackeln im rötlichen Glanz.
es lockt die Gitarre, die Zimbel klingt.
Wie wild und wilder der Reigen sich schlingt!

Dann ruh'n sie ermüdet vom nächtlichen reih'n.
Es rauschen die Buchen in Schlummer sie ein.
Und die aus der glücklichen Heimat verbannt,
sie schauen im Traume das glückliche Land.

Doch wie nun im Osten der Morgen erwacht,
verlöschen die schönen gebilde der Nacht,
es scharret das Maultier bei Tagesbeginn,
fort zieh'n die Gestalten, wer sagt dir wohin?

流浪の民

(大名死亡 訳)

森の影の中、ぶなの枝の間で、皆が動き、衣ずれをさせ、ささやき合っている。
炎はゆらめき、光はちらつく。色とりどりの姿に、葉むらに、石に。

そこには流浪のジプシーの群れがいたのだ。その目は輝き、その髪はひるがえる。
ナイルの聖なる流れのほとりで生まれ、スペインの南国の光に肌を焼いて。

掻き上げた草木に燃え上がる炎のまわり、荒ぶる勇ましい男たちは寝そべる。
女たちはかがんで食事を用意し、忙しく古い盃を満たしていく。

物語や歌の声が輪の中に響く、花咲き色鮮やかなスペインの庭のように。
悩みや危難を払う妖しの呪文を、皆の聞くままに老婆は唱える。

黒い瞳の乙女たちが踊りを始める。
そこへ松明は赤い光を投げる。
ギターが鳴り出し、シンバルが響く。
何と荒々しく踊りの輪のからみ合うことか！

やがて夜の踊りに疲れて皆はやすらう。
まどろみに聞こえるぶなの葉ずれ。
そして幸多き故郷を追われた者たちは
夢の中に幸せの国を見るのだ。

しかしもはや東の方朝は目ざめ、
美しい夜のさまを消していつている。
一日の始まりにラバは土に蹄を立て
ジプシーの群れは遠ざかっていく。ジプシーよ、誰が
「どこへ」と問うだろうか？